

— W. B. Yeats の詩 (1)

Meditations in Time of Civil War について

松 田 誠 思

I

イギリスのアイルランド統治をめぐる両国間の対立は、1910年代の後半とみに悪化し、各地で血なまぐさい抗争が絶えずくりかえされたが、イギリスの統治を拒否してアイルランドの完全独立を主張するシン・フェーン (Sinn Féin) 党が、1919年1月ダブリンにアイルランド共和国議会 (Dáil Eireann) の創設を宣言するにおよんで、最悪の事態をむかえた。アイルランド側では、義勇兵を主体に再編成されたアイルランド共和軍 (Irish Republican Army, 通称 I. R. A.) が、事態に対するイギリス政府のあいまいな態度と適確な措置の遅れに乗じて、反政府的ゲリラ活動を各地で展開した。その勢いは翌20年になるとさらに強まり、反乱の火の手は野火のように全土に広がっていった。一方イギリス側では、こうした事態の急激な変化に対する明確な認識を欠き、何一つ具体的な解決策を打出せなかったロイド・ジョージ政府が、まず現地の警察力による鎮圧を企図して失敗し、ようやく事態の深刻さに気づくと、あわててイギリス国内の警察、不正規兵を動員して、内外世論の激しい非難を浴びながらこれをアイルランドに派遣した。こうして、1920年の後半から翌21年の前半にかけて、両国の兵士の激しいゲリラ戦がくりひろげられることになった。世にいう「ブラック＝アンド＝タンズ・ウォー」 ('Black-and-Tans War') である。

アイルランドの民衆の多くは I. R. A. の掲げる理想に共鳴し、程度の差こそあれ内心これを支持していたことも事実だが、もちろん民衆のすべてが戦いに参加したわけではない。むしろ、義勇兵、不正規兵を主体とする両軍の抗争は徒に奇襲と報復のくりかえしに終始し、各地の住民を不必要に戦いに巻きこんだため、しだいに一般民衆の士気をくじく無秩序な動乱状態を現出したとい

ってよい。また、戦いの先頭に立った I. R. A. の急進派には、軍の理想に忠節を欠くとして民衆を無差別に銃殺するようなテロ行為に走るものも少なくなく、戦いは時とともに国全体を恐慌状態に陥らせる結果になった。

こうした事態の混迷をさらに深めたのは、アイルランド北部のアルスター (Ulster) 地方で火を吹いたカトリック、プロテスタント両派間の紛争である。アルスター諸州における両派の対立は根が深く、また同地はイギリス資本の流入によって歴史的にさまざまな複雑な要素をかかえており、ここにその詳細を述べるいとまはないが、当時の情勢に即していえば、共和派の台頭に伴う政治上の利害についての思わくが両派の積年の敵対意識と結びつき、衝突をひき起す大きな要因となったと見ていいであろう。つまり、アルスターを含むアイルランド全土がイギリスの統治を脱して完全に独立すれば、新たに設立される共和国議会は、南西部で絶対多数を占めるカトリックの支配するところとなるのはほぼ確実で、アルスター諸州でおおむね多数を制するプロテスタントは、そうした政治上の不利益を懸念するとともに、国内各地に散在する同派の孤立を恐れ、カトリックおよび共和派に対して異常な敵意を燃えあがらせたと想像される。両派の対立はアルスターのみならず国内各地で激化し、イギリス軍との戦いと相まって多数の犠牲者を出した。

その間、イギリス側の事態収拾への努力が皆無だったわけではなく、アイルランド側の指導者、特に共和派の幹部への非公式な働きかけ、懐柔策の試みはなされていた。しかし、ロイド・ジョージ政府が有効な政策を欠き、多分に日和見主義的立場をとっていたこともいめない。また、20年12月に議会を通過した新自治法案は、アイルランド全土を北 (アルスター6州) と南 (残りの26州) に分割し、おのおのに別個の議会を設置すること、従来よりも大幅な自治権の拡大を認めることなどを規程に盛りこみながら、最終的にはイギリス国王への忠誠を義務づける内容のものであったため、完全な独立を要求する共和派の強い反発をかい、かえって事態の解決を遅らせる大きな障害となった。

こうして、両国間の紛争は解決への糸口を見出せぬまま翌21年をむかえた。無秩序な動乱状態が長びくにつれて、アイルランド全土は荒廃し、民衆は疲弊

し苦い空しさをかみしめるようになった。戦いの発端は何であったにせよ、無政府状態に近い混乱の長期化は、道義的頹廢と人間相互の不信感をまねき、戦いの目的そのものさえ見失われがちな虚脱感が全土に広がっていった。イギリス側においても、国内の軍事情勢は悪化し、政府の政策を非難し平和を望む世論が高まって、ようやく両国間の紛争終結の気ざしが現われはじめた。I.R.A.は、指導者デ・ヴァレラ (de Valera) の司令を受けて武力行使を停止し(4月)、和平交渉の前提条件としてイギリスとの間に休戦協定を結んだ(7月)。同月、和平交渉が開始されると、イギリス政府は冒頭に和平の基本的条件として、(1)アイルランドはあくまでもイギリス帝国内にとどまるべきこと、(2)北アイルランドについては武力その他いかなる圧力もこれに加えてはならないこと、の二点を強硬に主張し、以上二つの条件の範囲内でアイルランドの自治を最大限認めるとの方針を明らかにした。(以後の交渉においてもこの方針は終始変わらなかった)。これに対して、アイルランド側は、名実ともに完全な独立を主張するデ・ヴァレラ派と、独立の名目は捨ててもなにがしかの実質(自治権の拡大)を獲得することの意義を強調するグリフィス派 (Griffith, Arthur) との対立が当初から激しく、統一的姿勢で強く交渉に臨むことができず、その結果、数ヶ月にわたる両国間の交渉は少しも進展を見ぬまま、徒に中断と再開をくりかえすのみであった。しかし、同年10月に再開された交渉に臨んだ共和国議会の代表団(グリフィスを中心とする代表団で、デ・ヴァレラは加わらずダブリンにとどまり交渉に対する遠隔操作をねらったといわれる)は、イギリス政府の代表ロイド・ジョージの老獪な術策に翻弄され、ダブリンの議会の賛否を取りつけぬまま、交渉の全権を委任されているという名目のもとに、イギリス側の提示していた「条件」をのんで、いわゆる「イギリス・アイルランド条約」の締結に同意した(調印は12月)。当然のことながら、代表団が帰国すると、さっそくダブリンの共和国議会は「条約」に対する賛否をめぐって、「条約」を有効とするグリフィス派と無効とするデ・ヴァレラ派とが激しい論戦を展開したが、両派たがいに主張を譲らぬまま年を越し、翌22年1月、投票の結果わずかの差で「条約」は承認され、ここに「アイルランド自由国」

（‘Irish Free State’）が正式に発足する運びとなったのである。

長い動乱に疲れ平和を熱望していたアイルランドの民衆は、「条約」の内容に必ずしも満足しなかったにせよ、議会の決定を歓迎したことは想像に難くない。「条約」に基づき、コリンズ（Collins, Michael）、コスグレイヴ（Cosgrave, W. T.）、オウ・ヒギンズ（O’Higgins, K.）などを中心に、いちばやく「仮政府」（「自由国政府」）が組織され、それまでイギリス政府の管轄下にあった建物や統治上用いられていた施設の明渡し、イギリス軍の撤退も着々と進められた。しかし、デ・ヴァレラを領袖とする急進派は、あくまでも「条約」の無効を主張して「仮政府」を認めず、つとに反対勢力を糾合して武力抵抗も辞さぬ強い態度を表明していた。また、I. R. A. 自体も、「条約」の批准を機に、賛成派と反対派がその勢力を二分するまでに激しく分裂していたが、ことに「共和国」に唯一絶対の忠誠を誓う軍の幹部クラスが大挙して反対派に投じたこともあって、一般民衆の心理的動揺ははなばだしく、一時は軍事政権樹立の可能性すらあったといわれる。ただ、こうして分裂した I. R. A. について、その賛成派を「国民軍」（‘Nationals’）ないしは「自由国軍」（‘Free State Troops’）と呼び、反対派を「不正規軍」（‘Irregulars’）と呼びならわしたところに、当時の民衆の微妙な感情がうかがえて興味深い。いずれにせよ、「アイルランド自由国」は発足の当初から、その内部で二つの対立勢力がにらみあい、内乱と分裂の危険を孕んでいたのである。

これと平行して、北アイルランドでも新しい議会と政府のもとに行政が開始されたが、これに対しては同地の少数派カトリックの反発が強く、また「アイルランド自由国」との国境問題をめぐるいざこざが続き、数年前のプロテスタントによるカトリック虐待の報復として南部諸州で北アイルランド商品の締出し運動が起るなど、絶えず紛争の危険にさらされていた。これらの諸問題のうちのいくつかは当事者相互の話しあいで解決されたが、未解決の問題はその後長く尾をひいて燻り続け、ことに、カトリック、プロテスタント両派の敵対関係は、I. R. A. の介入とからんで今なお血なまぐさい鬭争を惹起していることは、周知の通りである。

「アイルランド自由国」成立後初の総選挙は1922年6月に行なわれ、政府側が反対派をおさえて大勝した。これに自信を得た政府は、反政府派（あるいは反「条約」派）の不穏な動向に対するそれまでの消極的姿勢を捨て、これと正面から対決する積極的攻勢を開始した。それまで共和派の兵士による要人の誘拐、銃殺、あるいは法廷占拠などの挑発的行為に耐え、満を持していた政府は新たに編成された軍の力に訴えて一挙に報復攻撃の火ぶたを切り、ふたたび国を二分する勢力が入り乱れてゲリラ戦を展開し、内乱が始まったのである。しかし、数年前のイギリス軍との交戦の場合と違って、民衆はこれ以上同胞を傷つけあう抗争の継続を最初から望まず、ほとんど無関心な態度で傍観するものも少なくなかった。それに、反政府派が前年12月（「条約」をめぐる論戦が行なわれた時期）以来、公然と示していた民衆蔑視、世論軽視の言動が、戦いを見る民衆の目にあらわに読みとれ、彼らに対する不信感と違和感を深めたことも十分考えられる。民衆は I. R. A の「不正規軍」の過激な行動に背を向け、イギリスとの妥協によるにせよ漸進的な民族の開放を目ざす政府を支持するようになっていった。従って、同年10月、「不正規軍」の擁するデ・ヴァレラが、アイルランドにおける唯一の合法政権として「共和国政府」の樹立を企図したにもかかわらず、民衆の支持をほとんど得られず失敗に終わったのも、当然の成行きというほかない。デ・ヴァレラに代表される急進派は、理想を追求するに急なあまり時流の中で孤立し、挫折を余儀なくされたのであった。一説によれば、この内乱中「自由国政府」の手で葬られた共和派の処刑者数は、最後の6ヶ月だけでも、1916年から21年までの5年間余りにイギリス官憲の弾圧を受けて処刑されたもののほぼ二倍に達するといわれている。

政府側の勝利が確定的となった1923年5月、あくまでも共和国実現の夢に固執しながら、デ・ヴァレラは攻撃中止を声明して、以後しばらく雌伏する。こうして、約1年にわたる内乱に終止符が打たれ、「アイルランド自由国」は内外の諸問題と取りくむ新たな一步を踏み出すのである。

II

Meditations in Time of Civil War は、*Easter 1916*(1916) や *Nineteen*

Hundred and Nineteen (1919) などとともに、上述した時期のアイルランドの状況を色濃く感じさせる作品で、1921年から23年にかけて書かれた一連の詩7篇を集めた大作である。ただ、文字通り内乱当時の緊迫した状況下の「冥想」でありながら、むしろ内乱の具体的事実に言及するところ少なく、イエイツ自身の内乱に関する政治的見解もさだかに示されていない。これは、イエイツが個人的に内乱の動向とアイルランドの未来を深く憂慮し、公の場でも上院議員として事態の収拾に関する提案をしたりしていたことを思えば、いくぶん奇妙な感じがしないでもない。しかし、なまのまの現実が詩の中に侵入するとか、なんらかの政治的主張が詩の前面に押しだされるとかいった事態は、政治的宣伝や事実の記録、さらにはそれらによる実際的効果を第一義の目的としない詩にとって、健康な生命を保つ上でその妨げにこそなれ支えになることはまずあるまい。もちろん、政治上のある具体的事実もしくは事態が詩の題材となることは珍しくなく、また、それに対する作者の立場や見解の表明が作詩の動機に含まれることも少なくないが、それらは一応作品の出来ばえとは無縁であり、作品の評価を左右する決定的な要素とはなりえない。そうした事実（事態）の意義は元来相対的なもので、当初どんなに刺激的に見えるにせよ、状況の推移に応じて変質するのがふつうだし、より広い歴史のパースペクティブの中ではほとんど無に帰することさえ十分ありうるからである。イエイツに関していえば、詩は政治に対して本質的に相容れぬものを持っており、詩をなんらかの政治上の目的に従属させることは許されないとしながら、たとえば、*September 1913, To a Friend whose Work has come to Nothing, To a Shade* など、明らかに呼びかける相手と具体的事実を念頭において、自己の立場を表明し、いわば「政治的武器」として書いた詩がある。イエイツにおける詩と政治との係わりあいは重要な問題であり、稿を改めて論じなければならないが、彼の作品中、ふつう政治詩として分類されているものも、個々の作品において「政治」の占める位置はさまざまであり、作品そのものの出来、不出来にもかなりの差が認められる。しかし、それらすべての作品は、時代の現実とより深く係わろうとする真率な態度で貫かれており、最良のいくつかの作品に

は、時代の政治的動向とさらにその奥にある人間の意識に敏感に反応し、これを忠実に映しだした鏡のような趣がある。

Meditations in Time of Civil War は、当時のアイルランドの状況に対するイエイツの政治的発言を企図して書かれたのではないが、内乱の深刻な事態を憂慮する気持が作詩の動機に含まれていたことは確かであり、また、詩の全体に当時の暗うつな雰囲気強く反映されている。その意味では、これを政治詩と呼んで差支えないであろう。ただ注意すべきことは、内乱の深刻な事態に対する憂慮の念は、外に向って訴えかける形をとらず、イエイツの内面に突きささって、自己のあり方を問いなおさせる形で働き、詩全体のテーマと結びついている点である。*Meditations*……の7篇の詩は、詩人として生きる彼の自己をさまざまな角度から検討し、自己のあるべき姿を探究するというテーマを担っているが、内乱はこうした問いを生む契機となっているのである。また、詩の全体をおおう暗うつな気分は、イエイツ自身の「終末」の予感と、内乱によって精神的にも物質的にも荒廃の著しい当時の時代的雰囲気を映しており、7つの詩篇を通じて有機的に展開されるテーマの一貫性を強調する背景をなしているのである。

なお、*Meditations*……を構成する各詩篇の標題と詩篇の配列の仕方は、全体のテーマの展開をたどる上で重要な指示を含んでいるので、各詩篇の考察に入る前に、配列順にその標題を記しておこう。

- [I] "Ancestral Houses"
- [II] "My House"
- [III] "My Table"
- [IV] "My Descendants"
- [V] "The Road at My Door"
- [VI] "The Stare's Nest by My Window"
- [VII] "I see Phantoms of Hatred and of the Heart's Fullness
and of the Coming Emptiness"

III

18世紀から19世紀初頭あたりまでのアイルランドの貴族階級（広大な地所と多数の小作人をかかえた富有な地主たち）に広く見られた、何ものにも縛られぬ自由闊達な精神と旺盛な生のエネルギーは、19世紀後半になってアイルランド全体を襲った激しい社会変動の波にさらされ、しだいに影をひそめていった。イエイツはこうした伝統的美質の衰退を若いころから目のあたりにし、深く憂慮していたが、一方、自らはその継承者となり、詩業を通じてこれを培うとともに、子孫に伝える使命感を抱いていた。彼にとって最も身近な伝統とは、18世紀以来、主として富有な貴族たちによって培われてきた人間的美徳と安定した生活、そこから産みだされた美しく堅固なもの、要するに大地に深く根ざした生の営みであった。従って、1920年前後の戦乱を境に、旧秩序の担い手であった地主階級の没落がほとんど決定的となったことは、彼らに代表される伝統の実質的崩壊を意味し、イエイツは深い喪失感のうちに自己の詩人としての基盤を問いなおさなければならなかったと想像される。

“Ancestral Houses” では、先祖の自由闊達な精神と旺盛な生のエネルギー、そこから産みだされた諸々の産物を賛美する気持と、彼らの大地に密着した生活の所産が今や往時の豊かな生命力を失って形骸化しているのを悲しむ気持とがないまぜられ、屈折の多い詩行に表現されている。

Surely among a rich man's flowering lawns,
Amid the rustle of his planted hills,
Life overflows without ambitious pains;
And rains down life until the basin spills,
And mounts more dizzy high the more it rains
As though to choose whatever shape it wills
And never stoop to a mechanical
Or servile shape, at others' beck and call.

(“Ancestral Houses”, 11. 1-8)

先祖代々の生の持続を支えてきた広大な地所と大邸宅、咲き乱れる花、おい

茂る樹々。そこに「生命は勞せずして横溢している。」外界の何ものに強いら
れるでもなく、何ものを支配しようともせず、内部に孕む喜びそのものの源か
らほとばしり出て流れ、自足した形をとる生命——冒頭に提示される「泉」
('fountain') のイメージは、そういう生命の最も自然な発露と自足した喜び
を表現している。おそらく、ここには大地との堅固な結びつきのうちに生の営
みの基礎を置いた先祖への憧憬がかくされていよう。しかし、同時に、時間を
はじめ諸々の外的条件の制約と闘うことによってしか自己の生を形造ることが
できないのが人間の現実態であってみれば、「泉」のイメージに暗示される自
発的な生のあり方は、人間の活動の原型ではありえても、活動の現実的過程と
はなりえない。従って、これをそのまま先祖の生の営みの現実態と同一視する
ことは許されないであろう。むしろ、それは、人間の歴史に係わりなく存在し
続ける自然の根源的生命のイメージとして、詩人の夢の中に息づいているもの
であって、歴史の中で営まれる人間の現実的な生と対立するものなのである。

Mere dreams, mere dreams! Yet Homer had not sung

Had he not found it certain beyond dreams

That out of life's own self-delight had sprung

The abounding glittering jet;……

(ibid., 11. 9-12)

そして、こうした詩人の創造の源泉として「夢」の中に息づいている自然の
根源的生命のイメージ（「泉」）に対して、歴史の中で営まれる人間の生とそ
の所産を表現するイメージが新たに提示され、先祖の生の栄光をしのばせる広
大な地所や大邸宅、あるいはそこに遺された石像や肖像画などの現在における
意味を規定しなおすのである。「豊饒な生の大海の底から打ちあげられた不思
議に美しい空っぽの貝殻」 ('some marvellous empty sea-shell flung/
Out of the obscure dark of the rich streams,') という生と死の表裏した
イメージがそれだが、ここには、先祖の血と汗の結晶として産みだされたもの
が、時代の推移とともに当初の意味を失って変質し、それを受継ぐ子孫にとっ
ては、もはや美しいが無意味な遺物でしかなくなるという人間世界の皮肉な運

命が暗示されている。建築家、彫刻家、画家などのように創造への激しい情熱と卓越した手腕を持つ芸術家の作品といえども、決して例外ではありえない。後半の3つのスタンザでは、そうした人間世界の避けがたい転変を強調する詩行が重ねられ、冒頭の「泉」のイメージとははるかに遠い、歴史のある暗い力、人間の生の営みから形造られながら逆にそれを破壊し無に帰する危険性を孕んだ歴史のダイナミックスが感じられる。

Some violent bitter man, some powerful man
Called architect and artist in, that they,
Bitter and violent men, might rear in stone
The sweetness that all longed for night and day,
The gentleness none there had ever known;
But when the master's buried mice can play,
And maybe the great-grandson of that house,
For all its bronze and marble, 's but a mouse.

.....

O what if levelled lawns and gravelled ways
Where slippered Contemplation finds his ease
And Childhood a delight for every sense,
But take our greatness with our violence?

.....

What if those things the greatest of mankind
Consider most to magnify, or to bless,
But take our greatness with our bitterness?

(ibid, 11., 17-40)

18世紀の芸術家の手になるさまざまの創造は、「泉」のように湧きあがる生のエネルギーから労せずして達成されたのではない。‘violent’、‘bitter’、‘powerful’など、連関して用いられている形容詞の指示するところは、不変の美しい形象を産みだそうとする疼くような内的欲求の激しさ、創造への情熱、

困難をのり越えて忍耐強く続けられる労働といったものであろう。しかし、とうして達成された数々の優美な形象も、まさにその優美さゆえに、それを産みだす根源にあった創造者の苦悩や痛切な願望に対する後世の意識を眠らせるといふ背理を含んでいるのである。先祖の達成したものがどんなに美しく快いにしても、もしそこに彼らの生の息吹きが生き生きと感じられないならば、自分も含めて現在に生きる人々は、そこから真に創造的なエネルギーを汲みとることができないのみならず、先祖とは違った形をとるにせよ、自己の生を形造る意志とその過程で現実世界が強いる困難と闘う創造への情熱を空洞化する、一種の否定的力として働くのではなかろうか？—— こういう疑問でしめくくられる“Ancestral Houses”は、先祖の達成したものとそれが現在の世界に対して持っている意味を、「豊饒な生の大海の底から打ちあげられた不思議に美しい空っぽの貝殻」としてとらえ、過去に対する「私」の態度を明確化するとともに、現在の世界と向きあって自己の生の様式を探究しようとする *Meditations* ……全体の序曲としての意味をもっているのである。

“Ancestral Houses”が、自然の根源的生命との対比において、いわば夢の中で息づいている先祖の生を描いていたのに対して、つぎの“My House”と“My Table”は、詩人である「私」が生きる拠り所として、現在確実に所有しているものをいくつかの象徴的イメージによって提示しているといえよう。

「私」の目が過去から現在へ、夢の世界から眼前の現実に向けられるといいかえてもよい。ここでは、有象無象の跳梁する気違いじみた時流に背を向け、世事に追われる群衆を離れて孤立し、ひたすら自己との内面的対話と不変の美についての夢想によって自己の生を培い、それを形象化することによって「現実」を超えようとする詩人の意志的態度が表明されているのである。

イエイツは、1917年以来、アイルランドの西海岸ゴールウェイ (Galway) にある古塔で一年の数ヶ月を家族とともに過ごすのを例とした。内乱が勃発したのは、ちょうど一家がこの地に滞在中のことであった。ダブリンから遠く離れていたために、内乱勃発の経緯について十分な情報が得られず、当初はおおむね沈黙を保ち、いくぶん超越的な態度を持していたが、しだいに深刻化する

事態は彼の内面を大きな不安と憂慮の影で満たし、アイルランドの未来に終末の暗い予感を深めたと想像される。血なまぐさい殺戮事件や無意味な破壊行為が彼の身辺でも起り、塔に引きこもった一家の身の安全が脅されることも一再ならずあったといわれる。(イエイツは直接内乱に参加しなかったが、それは内乱の原因となった両派の政治的主張の違いはどうであれ、同胞相食む戦いは、精神的にも物質的にも祖国の伝統的美質を蝕み荒廃をもたらすことに変わりはないからであろう。)

Meditations …… の大部分の詩はそのような状況下に書かれたが、“My House” の冒頭には、この古塔を取巻く凜然とした風景がきわめて個性的な手法で刻みつけられている。

An ancient bridge, and a more ancient tower,
A farmhouse that is sheltered by its wall,
An acre of stony ground,
Where the symbolic rose can break in flower,
Old ragged elms, old thorns innumerable,
The sound of the rain or sound
Of every wind that blows;
The stilted water-hen
Crossing stream again
Scared by the splashing of a dozen cows;

(“My House,” 11. 1-10)

遠い昔に作られた橋も塔も農屋も古びて、今や先祖の生の栄光はその跡をとどめず、楡の木や茨のしげみも、老いた無残な姿を風雨にさらしている。岩だらけの地面に花を咲かせるバラだけが、この荒涼とした風景の中で、屈することなく持続される生の営みを象徴しているように見える。最後の数行でバンと牛のいくぶんユーモラスな姿が描かれてはいるが、人影はまったく見当たらない。‘bitter’, ‘violent’, ‘harsh’, ‘gloomy’ などの形容詞がぴったりするこの暗うつな風景は、確かに「私」の外部にある自然を描いたものに違いないが、

同時にここには内乱で荒廃しつつあるアイルランドの現実が映しだされているともいえよう。「象徴のバラが花を咲かせる 1 エーカーの岩盤」(‘An acre of stony ground, / Where the symbolic rose can break in flower,’) という緊張感に満ちた詩行には、不毛とも見える荒涼とした現実と闘い、これと拮抗して自己の生を形造ろうとする詩人の意志がうかがえる。さらにいえば、前述の外的風景全体は、この 2 行によって「私」の内的風景に変貌し、現実に対する「私」の認識を表現する象徴的イメージとなっているのである。しかし、不毛に近い堅い岩盤に花を咲かせるバラのイメージが、詩人として生きる「私」の生への意志を暗示することは確かだとしても、その意志は具体的にどんな詩人としてのあり方を志向するのか、ここではまだ明らかでない。

つぎの 2 つのスタンザでは、まず、「私」の現在の生活が、俗世間との交渉を絶ち、世界の暗い終末を予感しながら英知を探究する「孤高の聖者」のイメージによって提示され(‘A winding stair, a chamber arched with stone, / A grey stone fireplace with an open hearth, / A candle and written page.’) (11. 11-13), つづいて、こういう孤立者の道をあえて選びとった「私」と、同じく孤立者の逆境に耐えて生きた二人の先行者とが、「塔」のイメージを介して結びつけられる。一人は、俗塵を去って塔にこもり、ダイモンの声に耳を傾けることによって英知を獲得し世界についてある超越的真理を見出そうとする『イル・ペンセロウソ』のプラトン学者であり(‘Il Penseroso’s Platonist toiled on/In some like chamber, shadowing forth / How daemonic rage / Imagined everything.’) (11. 14-17)、もう一人は、かつて、戦闘のさなかに、自分の信ずる大義を守る最後の砦として塔(現在「私」が住んでいる塔)に立てこもり、闘いが長びくにつれて外の世界のことを忘れまた外の世界からもその存在を忘れられて、ただ一人孤独に死んだ「兵士」(‘man-at-arms’)である。形而上的真理をひたすら追いつづけた学者と大義に自己の生を捧げつくした兵士——彼らは一面、たしかに対照的な存在であるが、時流に背を向け俗世間との交りを絶つ(世間的に死ぬ)ことによって、それぞれ自己の生に統一的な形を与えようとした点では共通している。そし

て、乱世における自己の存在の仕方を確立しようとする「私」は、過去の遺物の上に安住するのではなく、また現在の混沌に身を没して漂流するのでもなく、孤立者の逆境に耐えたこれら二人の先行者の孤独な精神を継承して、これに形を与え、子孫に伝える媒介者として自己を規定するのである。（“…… that after me / My bodily heirs may find, / To exalt a lonely mind, / Befitting emblems of adversity.”）（11. 27-30）。それは、もちろん、「私」にとって詩人の孤独な作業に専心することを意味するが、ここで「塔」を介して結びつけられている二人の孤立者のあり方は、「私」の内部にあってこれと見合う二つの対照的な志向性を暗示しているといっておかろう。従って、詩作するとは当然この二つの志向性を何らかの形で釣合わせ、自己の生に均衡を与えるものでなければならない。事実、超越的英知を探究する聖者と大義のために自己の生を捧げつくす行動家——両者への志向性が生み出すディレンマは、イエイツの詩における重要なテーマの一部をなしているのである。

“My House” は、「私」の内面および外界の現実に対する認識を「塔」を中心とする象徴的風景のうちに定着し、「塔」を詩人として生きる拠り所として、「逆境」に耐え抜く「孤独な精神」の象徴性をこれに与えているといえよう。

しかし、終末に向って止めどもなく流れてゆくような現実世界の混沌と対峙して、その果てしない流動に抗するかのようになっている塔、そこにおける「私」の詩作生活は、あの堅い岩盤に花を咲かせるバラのように、生の持続と美を象徴する意味を持ちうるであろうか。あるいは、大地に根ざした本来的自己の生を確立しようとして塔に立てこもり、詩作生活に専念することが、外界との生き生きとした交流を絶った孤立者の逆境のゆえに、現実世界の人々のために何か意義あるものを産むどころか、閉ざされた情念の内攻、観念の自己増殖をもたらす危険性を孕んではいないであろうか。

“My Table” には、こういう危険性を自覚している「私」が塔における孤独な詩作生活を導き、それに統一感を与える不変の美の象徴として座右に備えている「不変の刀」（‘changeless sword’）が、つぎのような特徴的表現を通じて導入される。

In Sato's house,

Curved like new-moon, moon-luminous,

It [changeless sword] lay five hundred years.

Yet if no change appears

No moon; only an aching heart

Conceives a changeless work of art.

(“My Table”, 11. 9-14)

自分とは異なる伝統に育まれた異なる民族の手で鑄造された刀が、刀鍛冶の死をはるかに越えて 500年 もの間、子孫から子孫へと受継がれて今もなお、「新月にも似た曲線美」(‘Curved like new moon’)と「月光を思わせる輝き」(‘moon-luminous’)をいささかも失っていない。それ自体一つの驚異にちがいないが、眼前の刀は異なる伝統の中で産みだされ生きつづけてきたものであるだけに(これは、1920年、アメリカ旅行中のイエイツに日本人佐藤某が贈った刀である)、「私」はそこに一種の不安と脅威を感じずにはいられない。そして、一般にすぐれた芸術作品とそれを創造する芸術家との間にあるべき関係について、自分の抱いている確信に照らして、この「不変の刀」を創った刀鍛冶とそれを今日まで代々受継いできた子孫たちの内面的生活のありようを思い描くのである。現実世界の絶えざる変転と自己の生の有限性が強いるさまさまの困難と悲痛な情念、そしてこれを超越して不変(普遍)の世界へ参入しようとするやみがたい内的欲求に「疼いている心のみが、不変の芸術作品を胚胎しうる」のだとすれば、この「刀」の創造者と継承者の内面的生活(心)も別様ではありえない。(‘Curved like new moon’ および ‘moon-luminous’ の ‘moon’ は、刀の非情なまでの美しさを形容すると同時に、変化を本質とする人間の情念の支配者の連想を伴い、不変の美とその創造者の「内面の疼き」(‘an aching heart’)を結びつける表現である。)こうして、「私」が眼前に見る美しい刀から想像する彼らの内面的生活とは、つぎのようなものである。

Soul's beauty being most adored,
Men and their business took
The soul's unchanging look;
For the most rich inheritor,
Knowing that none could pass Heaven's door
That loved the inferior art,
Had such an aching heart
That he, although a country's talk
For silken clothes and stately walk,
Had waking wits; It seemed
Juno's peacock screamed.

(ibid., 11, 22-32)

つまり、「魂の不変の相貌」を体現する作品の創造と継承を可能にしたのは、「魂の美しさ」を希求し、俗世の有為転変を超越した世界への救済を渴望するような生の主導的感情の長い持続である、ということになる。それは、まさしく「私」が自己の生の秩序を形造る上でその根本原理にしようとしたものであったが、同時に、そのために「私」が自分の属する共同体の中で孤立者の道を選ばざるをえなかったとすれば、そういう孤立者は、素朴に理想に身をゆだねることができるであろうか。同時代者との共生感が失われれば、自己の生の秩序を形造ろうとする意志そのものが、孤立者の内面にある種の歪みをもたらすことになるのではあるまいか。それに、われわれは上に引用した一節を読むと、ただちにあの“Ancestral Houses”に描かれていた現実、伝統の空洞化の著しい世界を想起せずにはいられない。それは、「不変の刀」とその継承者から想像される異国の伝統の持続とは対照的に、先祖の創造物が、それを継承する子孫にとって、もはやなまなましい息吹きを感じさせない「美しいが空っぽの貝殻」にすぎないような世界なのである。従って、「塔」にあってこの刀に象徴されるような不変の美を創造しようとする「私」の夢も、ロマンティックな空想に終る危険性をますます強く感じさせるのである。こうして、伝

統の精神的継承の問題をめぐって、「私」はふたたび現実にたちかえり、「私」の精神の継承者となるべき子孫に思いをはせることになるのである。

“Ancestral Houses”が過去の伝統的世界の現在における意味を規定し、“My House”と“My Table”が「私」の属する現実とそこにおける「私」の生の営みを象徴的に提示していたとすれば、つぎの“My Descendants”は、標題の示すとおりに、現在の「私」のあり方を未来（「子孫」）の光に照らして規定しなおしているといえよう。いいかえれば、あの刀に体現されているような時間を超えた不変の芸術美の世界から、時間の支配する世界、さまざまな情念が生起と消失をくりかえす現実の日常的世界に立ちかえり、自ら選びとった孤立者の立場の持つ精神的、物質的意味を、主として子孫との関係において明確化しようと試みているのである。そして、ここでは、“My House”で象徴的風景のうちに提示された現実の状況と自己の立場とが、「崩れかかった塔」（‘the cracked masonry’）に立てこもる「私」の暗い情念と結びつけられ、より具体的に、より感覚的にイメージ化されているのである。

Having inherited a vigorous mind

From my old fathers, I must nourish dreams

And leave a woman and a man behind

As vigorous of mind, and yet it seems

Life scarce can cast a fragrance on the wind,

Scarce spread a glory to the morning beams,

But the torn petals strew the garden plot;

And there's but common greenness after that.

（“My Descendants”, 11. 1-8）

先祖から受継いだ「生の力の横溢する自由濶達な精神」（‘a vigorous mind’）をもって「夢を育み」（‘nourish dreams’）、それを子孫に伝える使命を帯びた「私」と、これを阻み、あたかも花卉を吹き散らし莖をへしおる強風のように襲いかかって、人間の生の営みと社会の秩序を容赦なくなぎ倒し「全面的な荒廃」（‘common greenness’）をもたらすように見える歴史のあ

る破壊的な力との対比——これはあの“*My House*”の冒頭に見える象徴的風景を喚起する（両者を結びつけるのは‘*life*’に係わる「花」の象徴的イメージである）が、ここでは、「私」の意志的な生の営みの挫折と時代の全般的荒廃を重ねあわせた表現が優勢を占めているとあってよい。一口にいえば、終末を予感させるような暗い雰囲気全体をおおっているのである。その予感に導かれるようにして、「私」は自分の子孫の運命に思いをはせる——先祖の生から刻みだされた諸々の産物が今や美しい遺物でしかないのと同じように、先祖から受継いだ精神的伝統に立って不変の美を夢想し、これを形象化しようとする「私」の営みもはかない夢となりおわり、子孫にかえりみられることなく消失するのではないか。子孫が魂の頽廃に甘んじ、生への意志を喪失して、徒に時流を追い世事に追われて自己の生のエネルギーを蕩尽するとすれば、彼らにとって、不変なるもの不滅なるものに託した「私」の夢など、どんな意味がありえよう？また、もしそうなれば、逆境に耐える孤独な精神の象徴としての「塔」が、彼らに対して何らの意味も持ちえないのは明らかであろう。こうして、過去にも未来にも自己の夢を委託できる確かな拠り所を見出せぬ「私」は、自己の魂を培う場として、また生の持続の証しとして自ら選んだ塔の壊滅を祈る暗い情念にとらわれるのである。

May this laborious stair and this stark tower

Become a roofless ruin that the owl

May build in the cracked masonry and cry

Her desolation to the desolate sky.

(*ibid.*, 11. 13-16)

しかし、これは、単に破滅のための破滅を願う絶望者の自暴自棄の祈りと見なされるべきではないであろう。かつて、自分の信ずる大義への忠誠の証しとして、同じ塔に立てこもり人知れず破滅した「兵士」も、こうした暗い情念に身を委ねたのではあるまいか。あの「兵士」は大義への忠誠を捨てておめおめと生きのびるよりも孤独な死を選んだが、「私」の場合、先祖と子孫を結びつける中間者として自己の生のすべてを託した「塔」が、その象徴的意味を失う

とすれば、無意味な遺物として子孫に継承されるよりも、「屋根のない廃墟」(‘a roofless ruin’)となってふくろうの佗住居となり、やがては土塊となり果て、いわば自然に帰ることを望む。なぜなら、先祖の精神的伝統の最後の継承者としての誇りと自己の生の営みの純一性を保証するには、それ以外の道が考えられないからである。それに、こうした一種悪魔的な祈りは、同時代者からの孤立感の深さ、同じ共同体の成員との共生感の欠如を物語るものであるかもしれない。

子孫との精神的断絶を予感し、周囲の到る所に伝統の崩壊(塔の「ひび割れた石壁」に象徴的に表現されている)と、終末に向う時代の動きを読みとる「私」は、閉ざされた暗い情念から本能的に身をひきはなすようにして、塔の内部における現在の生活をかえりみ、数少ない人々との愛と友情を確認して、そこに当面の慰めを見出すのである。

I, that count myself most prosperous,
Seeing that love and friendship are enough,
For an old neighbour's friendship chose the house
And decked and altered it for a girl's love,
And know whatever flourish and decline
These stones remain their monument and mine.

(ibid., 11. 19-24)

「私」は、もはや、不変の芸術美の夢にも、逆境に耐える孤独な精神の象徴としての「塔」にも、自己の救いを求めようとはしない。たとえ一代限りのものにせよ、「私」を中心に愛と友情の絆で結びあわされた妻と友人の形造るささやかだが、また堅固な生活空間、それが唯一の確かな支えとして確認されるのである。塔はやがて崩れさり、廃墟と化すであろう。しかし、廃墟の「石」(‘These stones’)が「私」たちのささやかな自足した生活の記念碑として残ることで満足しなければならない。ここには、孤立者の自恃と自嘲が織りなされているとあってよからう。——だが、このような自足状態、外界に対して自己の生活空間を狭く閉ざしてしまう姿勢は、“Ancestral Houses”の冒頭に提

示された自然の根源的生命のイメージ（‘Life overflows without ambitious pains’）からも、同じ共同体の成員との共生感に支えられ、「石」によって優美な形象を産みだした18世紀の芸術家のあり方からも、なんと遠いことか。「私」にとって、孤立に伴うさまざまな危険性や生の歪みを克服する過程は、まだ終わってはいないのである。

第5番目の詩の標題“*The Road at My Door*”は、「私」の目が塔の内部から外部へ、自己から他者へ向けられることを暗示して、意味深いものがある。ここでは、未来に暗い終末を予感しながらあえて時流に背を向け、孤独な夢を培ってきたこれまでの自己満足的な詩人（「私」）に対して、危険な時流（内乱）に身を挺して生きる陽気な行動家が現われ、いわば、その行動家を鏡として詩人（「私」）の姿が写しだされる形になっている。

An affable Irregular,
A heavily Falstafian man,
Comes cracking jokes of civil war
As though to die by gunshot were
The finest play under the sun.

A brown Lieutenant and his men,
Half dressed in national uniform,
Stand at my door, and I complain
Of the foul weather, hail and rain,
A pear-tree broken by the storm.

I count those feathered balls of soot
The moor-hen guides upon the stream,
To silence the envy in my thought;
And turn towards my chamber, caught
In the cold snows of a dream.

（“*The Road at My Door*”）

銃弾に当たって死ぬのが最高の役まわりだといわんばかりに、内乱をたねに意気のいい冗談を飛ばしながらやってくるフォールスタッフ流の屈強な兵士（共和派の「不正規兵」）。無難作に制服を着流し、「私」の塔の入口に立ちどまって気軽に声をかける国民軍の兵士たち。彼らは内乱における敵手同士であるが、ともに刻々と変化する内乱の事態を分かちあい、それぞれの信ずる大義を守るために身をもって生きる行動家であり、死を恐れぬ荒武者であって、同じく不屈の行動家ではあっても、大義への忠節を貫くために塔にたてこもり、世間を忘れ世間からも忘れられて人知れず死んだ、“My House”における「兵士」(‘man-at-arms’)と著しい対照をなしている。あの悲運の「兵士」は、時代を隔てて同じ塔に住む「私」にとって、孤立者の逆境とそれに耐える孤独な精神を共有する「私」の分身であり、いわば「『私』の内なる行動家」のイメージであったと見てさしつかえあるまい。それは、行きつく先も知らぬまま時流の中を漂う人々、行き暮れた旅人の群れ(‘benighted travellers’)をよそに、自己の内部の声に耳を傾けることによって未来を予知する孤立者として、時流に対峙する詩人の自負を支えるものであった。しかし、“The Road at My Door”に登場する兵士たちは、「夢」を育み魂を培うために孤塔に抛り、塔の外で荒れくるう内乱の嵐を拱手傍観する「私」の対極者である。彼らは、「私」があえて身をひいたその時流を生きる場として選び、それぞれ自己の立場を貫くために積極的に行動し、巧まざるユモアと剛気をもって逆境に対処している。そのしたたかな凶太さは、塔にあって「荒れ模様の天候」(‘the foul weather’)をかこち、「嵐のために折れた梨の木」(‘A pear-tree broken by the storm’)をなす術もなく見やる「私」の心に「羨望の念」(‘the envy’)をかきたてる(‘I complain/Of the foul weather, hail and rain, / A pear-tree broken by the storm.’ [イタリックは筆者]——これは、避けようもない荒天という自然現象と内乱の深刻な事態とを重ねあわせた表現で、ことにイタリックの部分は、‘An acre of stony ground, / Where the symbolic rose can break in flower’という“My House”の中のパセティックなイメージに示された意志的な詩人像と対照的に、内乱における詩人の無

力感、詩作の徒労感をかみしめる「私」自身の姿を写して間然するところがない)。そして、‘complain / Of the foul weather ……’, ‘A pear-tree broken by the storm’, ‘To silence the envy in my thought’, ‘caught / In the cold snows of a dream’ など、「私」の受身的姿勢を示す一連の心象表現にうかがえるように、ここでは逆境に耐える孤立者の自負は影をひそめ、挫折感と幻滅感をはっきり示すイメージ（上述したもの以外にも、アカライチョウが水の上でもてあそんでいる「羽毛のような煤の玉」‘those feathered balls of soot’ という、色あせた夢の断片を思わせるイメージがある）が大きな位置を占めている。

こうして、数少ない身近な人々の愛と友情を得て孤独な夢を追う自己満足的な詩人としてのあり方は、新たな光のもとに問いなおされなければならなくなる。そして、塔の内部と外部との関係、自己と他者との関係、さらには「塔」そのもののもつ意味をも問いなおすことによって、「私」は自己のあり方を探究するためのより包括的な視点へと導かれてゆくのである。

第6の詩 “The Stare’s Nest by My Window” は、「ゆるみかけた塔の石壁」(‘loosening masonry’) をはさんで、塔の内部における「私たち」の生活と塔の外部で進行中の内乱の事態とを交錯させ、両者の相違点よりも類似性を強調し、それを、塔の内外を問わず内乱の渦中にあるすべての人々が捕えられている共通の不幸だとする新たな視点のもとに書かれている。これは “The Road at My Door” における詩人の挫折感と幻滅感を乗り越えて、そのかなたに自己の存在の仕方を探究することをモチーフとし、一度失われた自己と外界との平衡関係をふたたび確立しようとする真率な祈りへと発展してゆくのである。

The bees build in the crevices
Of loosening masonry, and there
The mother birds bring grubs and flies.
My wall is loosening; honey-bees,
Come build in the empty house of the stare.

We are closed in, and the key is turned
On our uncertainty; somewhere
A man is killed, or a house burned,
Yet no clear fact to be discerned:
Come build in the empty house of the stare.

A barricade of stone or of wood;
Some fourteen days of civil war;
Last night they trundled down the road
That dead young soldier in his blood:
Come build in the empty house of the stare.

We had fed the heart on fantasies,
The heart's grown brutal from the fare;
More substance in our enmities
Than in our love; O honey-bees,
Come build in the empty house of the stare.

(“The Stare’s Nest by My Window”)

Meditations……全体のテーマとの関係においてこの詩を正当に理解するための一つの手掛りは、塔の「ゆるみかけた石壁の割れ目」(“the crevices / Of loosening masonry”)のイメージである。これは、“My Descendants”における「ひび割れた石壁」(“the cracked masonry”)と同じく、塔の崩壊を予兆し、「私」が塔に託した象徴的意味が空洞化しつつあることを暗示する。しかし、それが孤立の極にあった「私」のうちに破滅的な祈りを生んだ“My Descendants”の場合と違って、ここでは、そのあるがままの事態を率直に認める「私」の心を、外界に対して開かせる機縁となっているのである。石壁に囲まれた塔が、詩人の夢を育み、その夢の美しい形象化に刻苦する詩人の拠り所であり、時流の混沌を超越する孤高の精神の砦であったとすれば、塔の石壁がゆるみかけているとは、そういうかなりロマンティックな詩人のあり方が根底か

ら突きくずされる危険を意味する。けれども、一方、塔の石壁は、詩人と外界（自然も人間も含めた現実世界）とのなまなましい接触と交流を妨げ、いわば自他を隔てる心の「壁」を築くような心的態度を生む原因となっていたのではないか。「私たちは閉じこめられ、不安におびえながら鍵をかける……はっきりした事はなにもわからない。」（‘We are closed in, and the key is turned / On our uncertainty; …… no clear fact to be discerned’.）という、塔の生活の閉塞状態は、外界の確かな手応えを失ったものが、不確かな知識によって空想をたくましくし疑心暗鬼に陥る経緯と無関係ではなかろう。また、それは、塔の外部でそれぞれ大義名分を掲げ、「石とか木のバリケード」（‘A barricade of stone or of wood’）を築いてたてこもり、頑なに戦い続ける内乱の兵士たちについてもいえる。彼らは、おたがいに自派の殻に閉じこもり、流言蜚語を飛ばして徒に敵意をかきたてあっているうちに、しだいに戦いの目的や意味を見失ってしまい、無意味な殺戮と破壊をくりかえしているからである。塔に閉じこもり外界で進行中の現実の事態を何一つ正確に知りえぬ不安におびえながら、あるいはその不安のゆえに、すべてのものの終末を予感し自虐的空想にふける詩人と、大義名分を掲げて殺戮と破壊にあけくれ、ついにその大義を憎しみと敵意で塗りこめてしまった内乱の兵士たちとは、外見はどうか、行きつく先にそれほど違いがあるとも思えない。「ひさしく私たちは空想を糧に心を養ってきたが、これを喰ったおかげで心は残忍になってしまった。今では心の中身は愛よりも敵意の方にある。」（‘We had fed the heart on fantasies, / The heart’s grown brutal from the fare; / More substance in our enmities / Than in our love;’）— ‘We’ という主語からもわかるように、これは、彼我の別を問わず内乱の渦中にあるすべての同時代者が多少とも共有している不幸な事態に対する認識の表現である。各スタンザの最終行にくりかえされるリフレイン ‘[honey-bees,] / Come build in the empty house of the stare.’ は、「私」のこのような認識に基づいて生まれるわけであるが、その内容を検討する前に、イエイツの詩における「石」（‘stone’）のイメージについて若干ふれておきたい。

「石」に係わるイメージは、特にイエイツ後期の詩において、あるいは単独に、あるいは他のイメージと結びついて複合的に用いられ、イエイツの特異な認識を表現する重要なイメージである。その細目にわたっての詳しい検討は将来の研究課題とするつもりであるが、ここでは *Meditations* …… における「石」のイメージ（「塔」のイメージも含む）と類似した用法のものを一つだけ引いておこう。

Hearts with one purpose alone
Through summer and winter seem
Enchanted to a stone
To trouble the living stream.
The horse that comes from the road,
The rider, the birds that range
From cloud to tumbling cloud,
Minute by minute they change;
A shadow of cloud on the stream
Changes minute by minute;
A horse-hoof slides on the brim,
And a horse plashes within it;
The long-legged moor-hens dive,
And hens to moor-cocks call;
Minute by minute they live:
The stone's in the midst of all.

Too long sacrifice
Can make a stone of heart.

(*Easter 1916*, 11. 41-58)

イエイツが、「石」に係わるイメージを、しばしば矛盾、対立する要素（あるいは志向性）の同時的に存在する状態を表現するのに用いていることは、周知のとおりだが、この有名な詩においても、そういうアンビヴァレントな性格

ははっきり現われている。ここには、アイルランド独立を目ざして民衆を覚醒させるために、1916年の復活祭にダブリンで蜂起し、ただちに捕えられ銃殺された急進派の人々を哀悼するとともに、彼らの払った犠牲の大きさに対する痛恨のいりまじった複雑な気持を表現するために、「石」のイメージが用いられているのである。それは、一方において、生涯ただ一つの目的のために意志と情熱を捧げつくした人間のみが体現しうる不滅性の象徴として、あるいは、刻一刻と果てしなく流転する生のさなかにたちほだかって、これを堰とめる不変不動の実体として、肯定的意味を持っている。しかし、同時に他方では、ただ一つの目的のために果てしなく自己のすべてを捧げつくす人間が陥るある種の非人間的状態、つまり、あらゆる暖い感情が凍りついてしまった心の不毛性を表わす否定的意味をも持っている。いいかえれば、ある一つの目的のために（この詩においては、アイルランド独立という大義名分に）自己のすべてを賭ける人間は、死のうちに「不滅の生」を体現する可能性と、生のうち凍りつくような「死」を体現する可能性を同時に持っているわけで、「石」はこの逆説に表現を与えようとして用いられているのである。また、それはこのような逆説によって強いられたイエイツ自身の内面的葛藤を映していることもしばしばある。

「石」に係わるイメージ（「塔」も含む）は *Meditations*…… においても重要な意味を持ち、文脈に応じ、また全体のテーマの展開に従って、その象徴的意味を微妙に変えてゆくが、根本的には、おおむね上述しをアンビヴァレントな性格を保っているように思われる。たとえば、詩全体を通じて詩人（「私」）の内面劇の展開を支えている「塔」については、これまで各詩篇の考察にあたって特に注意を払い、その象徴的意味の変貌を跡づけてきた。これまでの考察を整理する意味で、「石」に係わるイメージをいくつか拾っておく。

- 1)that they,
Bitter and violent men, might rear in stone
The sweetness that all longed for night and day,
The gentleness none there had ever known;
("Ancestral Houses")

2) An acre of stony ground,
Where the symbolic rose can break in flower,
("My House")

3) May this laborious stair and this stark tower
Become a roofless ruin that the owl
May build in the cracked masonry………

.....
These stones remain their monument and mine.
("My Descendants")

4) The bees build in the crevices
Of loosening masonry,………

.....
My wall is loosening; honey-bees
Come build in the empty house of the stare.

A barricade of stone or of wood;
("The Stare's Nest by My Window")

これらの例に見える「石」の特質には、一方において、人間の生とそれに伴う痛苦に満ちた情念を昇華し、これを芸術美に形象化する堅固な実体としての記念碑的性格があると同時に、他方、生の自然な流動と柔軟性を阻害し、生と情念の不毛な凝固をもたらす「非人間的」性格がある。こうした「石」の意味の重層性は、*Meditations* ……全体を通じて、現われ方はさまざまだが、つねに持続されているとあってよい。テーマとの関連からいえば、“My House”において、逆境に耐える孤独な精神の継承者として孤立の道を選び、自分の住む塔にその象徴性を賦与しようとした「私」が、他者との生き生きとした接触を絶ったために、逆に塔の否定的力の犠牲となって自己満足と自虐に墮してゆく過程を表現する上で、肯定的力と否定的力の表裏した「石」のイメージが大きな

役割を演じていることに気づく。

“The Stare’s Nest by My Window” は、上述した過程において「塔」が「私」に及ぼした否定的力を脱して、より広い現実により自己を解きはなつ詩人の姿勢を暗示している。すなわち、ここでは、「塔」は当初「私」の望んだ象徴性を失って、単なる石造りの建物になる。しかし、それが外界との交流を妨げる「壁」として否定的力をなお保っていることに違いはないのだから、「ゆるみかけた石壁の割れ目」は、外界との生きたつながりを回復する端緒として、「私」にとっては肯定的意味をもちうるのである。18世紀の芸術家たちが痛苦に満ちた生を昇華し、「石」によって優美な形象を獲得したのにならって、「塔」によって不変の芸術美の形象化を夢みた「私」の試みは挫折したが、それによってかきたてられた破滅への暗い情念を癒し、「石」の否定的力を肯定力的に変えるための端緒がここにはある。このように見てくると、「蜜蜂よ、椋鳥の空っぽの住処にきて巣をつくれ。」(‘honey-bees, / Come build in the empty house of the stare.’) というリフレインの内容も自ずと察せられるであろう。これは、自然も人間も含めた真の意味での外界との生きたつながりを回復し、憎しみや敵意によるのではなく、愛と友情による人間相互の結びつきを得たいとする祈念なのである。視点をかえていえば、意味のレベルは多少異なるとしても、ここには、また、時代への呼びかけも含まれているのではあるまいか。つまり、内乱の事態に係わるすべての人々が共有する不幸に対して覚醒を促す警告としての意味である。それは、互いに自我(派)の殻に堅く閉じこもり、狭い穴から他者(敵)の動静をうかがうような心的態度が、どんなに相互不信をあおりたて共生感を阻害しているかを告げる、イエイツ自身の声とも受けとれるのである。

これまで自己の拠り所としてきた「塔」を、いくぶん自嘲的に「椋鳥の空っぽの住処」と呼ぶことによって、孤塔の夢想家がとらわれていた自負と自己満足の堅く閉ざされた殻を破り、外界に向って自己の孤独をさらす開かれた姿勢が獲得されたといえよう。そして、自己と外界との係わり方において「私」が詩人としてとる位置は、最後の詩 “I see Phantoms of Hatred and of the

Heart's Fullness and of the Coming Emptiness” に示されるのである。

I climb to the tower-top and lean upon broken stone,
A mist that is like blown snow is sweeping over all,
Valley, river, and elms, under the light of a moon
That seems unlike itself, that seems unchangeable,
A glittering sword out of the east. A puff of wind
And those white glimmering fragments of the mist sweep by.
Frenzies bewilder, reveries perturb the mind;
Monstrous familiar images swim to the mind's eye.

(“I see Phantoms……”, 11.-18)

塔の石壁の中で物狂おしい夢想に身をゆだねてきたこれまでの自分を、もっと広やかな空間に立って見つめなおそうとでもするかのように、今や「私」は塔の頂上の崩れかかった石にもたれて、吹く風に身をさらし、あの「不変の刀」の輝きにも似た月の光に照らされ白白と輝きながら風に渦まく霧の中に広がる風景を眺めている。見るものの想像力をかきたてずにはおかないこの一種不可思議な風景は、確かに塔の外にあって人々に共有されているにもかかわらず、これを描写するイメージは「私」の過去の夢を彷彿させるとともに、今は粉々に砕けて散ってゆく夢の残骸の「吹雪」を暗示して、いわば「私」の内的風景と重なりあっているのである。——「一陣の風」とともに霧が風景の彼方に消えさると、「私」自身の意識の暗く深い奥底から湧きあがり、「私」を呑みこむような圧倒的な力をもって押しよせる「奇怪な、しかし『私』にはなじみ深い」幻影の群れが、つぎつぎに現われ「心眼」をかすめる。その第一は「憎悪の幻影の群れ」(‘Phantoms of Hatred’)である。

In cloud-pale rags, or in lace,
The rage-driven, rage-tormented, and rage-hungry troop,
Trooper belabouring trooper, biting at arm or at face,
Plunges towards nothing, arms and fingers spreading wide

For the embrace of nothing,……

(ibid., 11. 10-14)

「激怒に駆られ、激怒に身を振り、激怒に飢えた騎兵隊」とは、「復讐」の目的を果たそうとして、相手を見出すために狂奔し、限りなく前進してゆくうちに相手を見出すどころか、狂熱にあおられて互いにつかみかかって、ひたすら破滅に向って突きすすんでゆく暴徒たちのことであろう。彼らの目は「外」に向って見開かれているが、「復讐」の相手はもちろん、敵味方の区別さえ見分けているわけではない。この巨大な「憎悪」の塊ともいべき集団には、まるで「虚無を抱くために……虚無に向って突進してゆく」ような同時代の愚衆の動きが映しだされているように見える。

つぎに現われるのは、第一の幻影によってかきみだされた「私」の心を慰撫するように、第一の群れとは対照的に、静かに「自足した心」(‘the heart’s fullness’)を「一角獣」の背に乗せ過ぎさってゆく女たちの幻影である。それは、自らの心の安らぎと肉体的美しさに自足し、自をつぶって自己陶醉の夢を見つづけているように見える。彼らにあっては、「あこがれの念そのものすら、あまりの過剰に耐えられず心の底にそれ自体の重みによって沈んでしまい」(‘even longing drowns under its own excess;’)、いわば心はさざなみ一つたたない「水たまり」(‘a pool’)となって静まりかえっているのである。第一の幻影たち(「憎悪の幻影」)が「外」に向って目を見開きながら、結局何一つ定かに見分けていなかったのとちょうど逆の形で、この女たちは目を閉じてひたすら「内」を見ているようだが、結局彼らも静まりかえった自らの心の中に「虚無」しか見てはいないのである。前者が行動の目的を見失って「憎悪」を自己目的化してしまったのと同じように、後者は「自己満足」と「自己陶醉」の閉ざされた世界に沈んで、もはや仮死状態にあるとってよかろう。その意味では、両者とも「虚無」の深淵になだれ落ちてゆく運命を共有しているのである。

The cloud-pale unicorns, the eyes of aquamarine,

The quivering half-closed eyelids, the rags of cloud or of lace,

Or eyes that rage has brightened, arms it has made lean,
Give place to an indifferent multitude, give place
To brazen hawks. Nor self-delighting reverie,
Nor hate of what's to come, nor pity for what's gone,
Nothing but grip of claw, and the eye's complacency,
The innumerable clanging wings that have put out the moon.

(ibid., 11. 25-32)

こうして第一、第二の幻影の群れは、「私」のこれまでたどってきた自己認識の過程で出会ったいくつかの問題を喚起しながら、最終的に視界から消えて、ここには、さらに恐ろしいもう一つの幻影が現われるのである。それは、自己の生に根ざした「夢」を織ることもせず、未来に対しても過ぎさった過去に対しても何ら生き生きとした感情を働かせることができず、ただ空ろなまなざしで「現在」を生きながらえる「無関心な群衆」と、ますます高度に組織化され、「群衆」に対して「非人間的」な力をふるい続ける巨大な権力の機構とを、イメージ化することによって垣間見られる「未来の空虚な世界」(‘the coming emptiness’)の幻影である。そこには、通常の人間的感情を通わせうるものは何一つ見当らず、これを見る「私」を吸いよせ呑みこんでしまいかねないようだ。——その危険から本能的に身を守るようにして「私」は現実の自己にたちかえり、現実世界において詩人としていかに生きるべきかという、*Meditations*……全体のテーマをふたたびとりあげ、これに暗示的な解答を与えて、詩を結ぶのである。

I turn away and shut the the door, and on the stair
Wonder how many times I could have proved my worth
In something that all others understand or share;
But O! ambitious heart, had such a proof drawn forth
A company of friends, a conscience set at ease,
It had but made us pine the more. The abstract joy,

The half-read wisdom of daemonic images,
Suffice the ageing man as once the growing boy.

(ibid., 11. 33-40)

ここには、自己認識を深めると同時に、詩人としてのあり方を確立しようとして演じられてきた「私」の内面劇の実体が率直に述べられている。それは、群衆を離れひたすら自己との内面的対話を通じて超越的な英知を獲得しようとする聖者的志向性と、現実世界のただ中で自分の義務を果たすために果敢に生きる行動家的志向性という、「私」のうちにある二つの対立的要素の間で演じられた劇である。そして、末尾の3行で語られているのは、これら二つの志向性のいずれにも全的に身を委ねず、いわばその中間者の位置に詩人として生きる場を求めようとする意志的態度であるといえよう。

《主な参考文献》

The Collected Poems of W. B. Yeats. (Macmillan, 1950)

The Variorum Edition of the Poems of W.B. Yeats (Macmillan, N.Y., 1971)

Wade, A., ed.: *The Letters of W.B. Yeats* (Rupert Hart-Davis, 1954)

Ellmann, R.: *Yeats The Man and the Masks* (Faber & Faber, 1965)

Henn, T.R. : *The Lonely Tower* (Menthuen, 1950)

Hone, J.M : *W.B. Yeats 1965—1939* (Macmillan, 1962)

Jeffares, N. : *W.B. Yeats: Mana and Poet* (Routledge and K. Paul, 1962)

Levin, B : *The Dissolving Image* (Wayne State University Press, 1970)

Stock, A.G : *W.B. Yeats His Poetry and Thought*

(Cambridge University Press, 1961)

Whitaker, T.R. : *Swan and Shadow* (Chapel Hill, 1964)

Bloom, H : *Yeats* (Oxford, 1970)